

中国人学習者の日本語類義複合動詞¹⁾の習得

——「～込む」、「～込める」、「～詰める」、「～入れる」を中心に

陳 麗麗

名古屋大学大学院国際言語文化研究科

qinlailai@hotmail.com

1. はじめに

本研究は、中国人学習者の日本語類義複合動詞¹⁾の習得に関する考察するものである。先行研究では、複合動詞は上級以上の日本語学習者においても難しい項目と言われてきた。複合動詞の中には、(1a)～(1d)のように同じ「内部への移動」を表す「～込む」、「～込める」、「～詰める」、「～入れる」という複合動詞がある。

- (1a) 綿を袋に押し込む。
- (1b) 綿を袋に押し込める。
- (1c) 綿を袋に押し詰める。
- (1d) 綿を袋に押し入れる。

しかし、(2)～(5)のようにその言葉が同じ意味を表しても使われる場面が完全に一致しているわけではない。

- (2) 傷薬を手に塗り込む／*塗り込める／*塗り詰める／*塗り入れる。
- (3) 人間を壁の中に塗り込める／*塗り込む／*塗り詰める／*塗り入れる。
- (4) 彼は一本気で、思い詰める／*思い込む／*思い込める／*思い入れると自殺するかもしれない。
- (5) 彼は私の説得を聞き入れた／*聞き込む／*聞き込める／*聞き詰める。

中国語には、二つの動詞を結合して一つの動詞として使うこともできるが、両言語の複合動詞の結合様式、意味、などが一致しているわけではないので、一対一に対応するというわけではない。例えば、中国語の「～進」、「～入」のような言葉は日本語の「～込む」、「～込める」、「～詰める」、「～入れる」と対応する場合があります、対応しない部分もある。この点で考え見れば、中国人学習者にとって、以上のような類義複合動詞意味的違い、使われる場面、使い分けに戸惑うということを考えられ、日本語の複合動詞の意味を正しく理解することはさらに難しくなると予想される。

したがって、博士論文では、まず「～込む」、「～込める」、「～詰める」、「～入れる」の類義的

1) ここで言う「複合動詞」とは、「投げ込む」、「飛び込む」、「泊り込む」、「歌い込む」のように、前項動詞V1（「投げる」、「飛ぶ」、「泊まる」、「歌う」）と後項動詞V2（「込む」）が結合する際、「V1連用形+V2」の形態を取るものを言う。

な意味を分析する予定である。その上に、中国人学習者におけるこの四つの複合動詞の習得に関する考察を行い、その結果に基づき中国人学習者における類義複合動詞に関する問題点を究明したい。

2. 先行研究

先行研究において、日本語複合動詞習得について研究したものは、松田 (2004)、松田・白石 (2006)、陳 (2004、2008)、白 (2005、2007) などがある。

(1)松田(2004)と松田・白石(2006)の研究

松田 (2004) は、「～込む」の意味を細かく分類することに主眼が置かれていた研究に対し、単純なコア図式で「～込む」を四つのタイプに大別した。

松田(2004):「～込む」の用法の分類

二格を伴う「～込む」		二格を伴わない「～込む」	
A タイプ	B タイプ	C タイプ	D タイプ
V1は「内部移動」を含まない	V1自身が「内部移動」を含意する	V1が示す状態への変化とその状態への固着	V1の反復行為により生じる状態変化(目標に向けて)
例) 飛び込む 呼び込む	例) 入り込む 植え込む	例) 冷え込む 眠り込む	例) 十分に走り込む

この分類に基づき、学習者の習得について考察した。その結果、学習者は上級者になっても「～込む」についての意味知識は十分ではないことが観察され、「～込む」の使用の拠り所となる認知的基盤の獲得は十分になされていないということが分かった。

松田・白石 (2006) は松田 (2004) と同じくコア図式で「とり～」の習得について考察した。その結果、母語話者が単純動詞と「とり+V2」の差異について形成する概念イメージはまとまったものであったのに対して、学習者の理解には非常にばらつきが見られたことである。また、学習者はプロトタイプ的な「とる」をイメージし、そのプロセスに単純動詞の意味を付加して理解しているようである。そして、上級者になると「とる」の概念イメージはかなり形成されていることがうかがえるのだが、母語話者のようには概念イメージが広がらない、という点である。

(2)陳(2004、2008)の研究

陳 (2004) は、複合動詞の中で使われる頻度が高い「～あう」「～込む」をとりあげて、中国人学習者の習得状況と習得プロセスを解明した。その結果、学習者にとって、「～あう」のプロトタイプ意味から拡張意味に類推することは難しいことが分かった。「～込む」に関しては、プロトタイプ的語義を内部移動、強調と捉えているが、ただの強調と捉えているのは問題であり、過剰般化になる可能性がある。

陳 (2008) は、学習者の運用データを用いて、学習者の複合動詞の使用実態の記述と習得プロセスの解明を目的している。話し言葉と書き言葉を使用して、全体の使用頻度、複合動詞のタイプ別、頻繁に使用する複合動詞項目、後項動詞別、前項動詞別、熟達度別と母語別の7つの視点から母語話者との比較、また中間言語同士の比較を行った。それを踏まえ、複合動詞の使用

実態の質的分析について行って、結果として、形式の面、後項動詞の自他動詞、本動詞のみの使用で十分なところでの複合動詞の使用などが目立った。

(3)白(2005、2007)の研究

白(2005)は、開始の意味を表す類義複合動詞後項「～出す」と「～始める」の使い分けに関して、日本語母語話者と韓国人学習者を対象に調査を行うことによって、「～出す」と「～始める」の意味の差に関する両集団の判断がどのようなところで異なっているかを見るものである。その結果、意志性のあることには「～始める」を、コントロールのできない突然の開始には「～出す」を使う傾向と自分の行動の開始＝「～始める」、第三者による動作の開始＝「～出す」のように単純化する傾向も見られた。学習者の意味領域は、典型性が高いものを中心に発展している可能性がある。

白(2007)は、日本語母語話者と意味領域を比較して、「～出す」に関して韓国語母語話者はどのような意味領域を持っているか、日本語母語話者とどのようなところで相違しているかを考察した。その結果、学習者は実験に対する判断基準は、母語知識の選択的な使用まだ不完全な日本語に対する知識とそれを補うための推論、そしてその語彙に関する学習経験から形成される。

まとめ

複合動詞の意味構造が複雑で多義的であるため、その意味分析に注目する研究が多いことに対し、日本語教育の支援として、学習者の習得状況・習得困難点を明らかにする研究が少ないのは現状である。

さらに、複合動詞の習得研究では、「～込む」の習得状況に主眼が置かれたが、「～込む」、「～込める」、「～詰める」、「～入れる」のような複雑で区別しにくい類義複合動詞に関する研究が少ない。また、複合動詞の習得状況に注目したことに対して、その原因をあまり分析していないのも現状である。

3. 研究内容

中国人学習者の日本語類義複合動詞の習得を考察するために、具体的には、以下の課題から研究を進める予定である。

- (1) 「～込む」、「～込める」、「～詰める」、「～入れる」の類義的な意味分析を行う。
- (2) 学習者は類義複合動詞の意味をどのように理解し、どのような意味知識を持っているか。
- (3) 日本人母語話者は類義複合動詞の意味をどのように理解し、どのような意味知識を持っているか。学習者と日本人母語話者を比較することによって、異なるところを探る。
- (4) 学習者は類義複合動詞のどのような側面が難しいと感じているか、どのような誤用があるか、その誤用の原因が何かについて分析する。
- (5) 学習者は日本語類義複合動詞の習得における対訳の問題点から母語干渉による正の転移と負の転移を考察する。

4. 調査

調査対象者:

- (1) 中国人学習者 50 名 (遼寧師範大学 25 名、大連外国語学院 25 名) :

高校以前では日本語学習歴はなく日本留学経験もなく日本語専攻の4年生とする。

(2) 日本人学習者 30名

日本の大学に所属される大学生とする。

(3) 日本人協力者 5名

日本語専攻あるいは日本語教育に関わる方に限られる。

調査内容・方法:

(1) 中国人学習者と日本人母語話者ともに「～込む」、「～込める」、「～詰める」、「～入れる」の選択テストを実施する。また、そういうふうを選択した理由とこのいくつかの類義複合動詞に関する判断基準についてインタビューを行うことによって記述するように求める。

(2) 中国人学習者と日本人母語話者ともに「～込む」、「～込める」、「～詰める」、「～入れる」を使って短文を作ってもらい。また、これらの類義複合動詞の使用頻度についてインタビューを行うことによって記述するように求める。

(3) 中国人学習者に「～込む」、「～込める」、「～詰める」、「～入れる」を含む文章を日本語から中国語に訳してもらい、また中国語の複合動詞「～進」「～入」を含む文章を中国語から日本語に訳してもらい。また、そういうふうに訳した理由についてインタビューを行うことによって記述するように求める。

実験の対象となる例文:

(1) 筆者が作成したもの。(2) 関連先行研究から拾い出すもの。(3) インターネットで検索するもの。(4) 朝日新聞と新潮文庫のCD-ROMなどから検索するもの。

調査を行った結果に基づき、中国人学習者の日本語類義複合動詞の習得の全体の傾向を把握し、そのうえに各項目それぞれの習得を分析する。また、日本人母語話者との差を確認した上に、分析を行う。

参考文献

- 陳曦 (2004) 「中国人学習者における複合動詞の習得に関する一考察—「～あう」と「～こむ」の理解に基づいて—」『ことばの科学』17 pp. 59-79
- 陳曦 (2008) 「第二言語としての日本語複合動詞の習得—コーパスによる使用実態の調査を中心に—」
- 白以然 (2005) 「複合動詞「～出す」・「～始める」の習得—韓国語を母語とする学習者の意識を中心に—」『人間文化論叢』18 pp. 307-315
- 白以然 (2007) 「韓国語母語話者の複合動詞「～出す」の習得—日本語母語話者と意味領域の比較を中心に—」『世界の日本語教育 日本語教育論集』17 pp. 79-91
- 松田文子 (2004) 『日本語複合動詞の習得研究—認知意味論による意味分析を通じて』ひつじ書房
- 松田文子・白石知代 (2006) 「コア図式を用いた複合動詞習得支援のための基礎研究: 「とり～」を事例として」『世界の日本語教育 日本語